

国際交流についての雑感

低温工学協会国際交流委員会委員長／京都大学

雨宮 尚之



国際交流委員長としての大きな役目が、2009 年応用超伝導・低温工学アジア会議（ACASC 2009）の開催でしたが、これも皆様のご協力を得て成功裏に終えることができました。協会会員各位のご協力に厚くお礼申し上げます。今回の開催にあたっては、前回の宮崎の会議の際に中心となったメンバーからの若返りを企図し、比較的若い（「比較的」ですが）実行委員が中心となって実務を実行し、それを前回会議の実行経験のあるベテランの実行委員がバックアップするという体制を可能な限り採用しました。この体制がうまく機能し、委員長業務の処理能力が不十分であったところも各担当実行委員のご尽力でカバーしていただくことができました。これが会議の成功の一因であったことを会員の皆様にお伝えし、国際交流委員長として、誌面を借りて現地実行委員の皆様に改めて感謝申し上げる次第です。

さて、この「低温工学」誌の巻頭言には、2007 年にも拙稿を掲載させていただいております。そのときは、Applied Superconductivity Conference, Inc. のボードメンバーとして、Applied Superconductivity Conference を例にとり、国際会議における存在感という観点から国際化についての私見を述べさせていただきました。今回は、少し視点を変えて、海外研究者との人的コネクションについて、少し感じるところを、残りの誌面を使って述べさせていただきたいと思っています。

これは大学所属の研究者（大型の国際的プロジェクトに参与している研究所は除きます）のみについての印象ですが、やや上の世代（概ね私より上の世代）に比べて若い世代において、海外研究者との個人的な人的コネクションが細くなっているのではないかと感じます。ひょっとしたら、日本の研究のレベルが向上したために、最近では昔ほど、欧米に長期の在外研究に行く研究者が減っていることも影響しているのかもしれない（海外でポストドクをされる方は増えている

かもしれませんから必ずしもあたっているかどうかはわかりませんが）。

国際的な研究の社会でも、仲間意識を共有した人的つながりによって構成されたコアとなる研究者グループを中心にして、ものごとが回っていくことは否定できないと思います。低温工学・応用超伝導にもさまざまな分野がありますが、それぞれの分野で、日本人研究者が、このようなコアとなるグループに関与していくことが重要だと思われます。そのためには、個人レベルでの公私両面でのコネクションがまず必要でしょう。この点、特に若手研究者の方々におかれては早いうちから意識されることをお勧めします。わかりやすく言えば、お互い一目おけて、ざっくばらんに話しができ、国際会議の場で久しぶりにあったときには気軽に飯を食いにいけるような研究者仲間は財産であるということです。このような人的コネクション、ネットワークの重要性は国内であればすぐに理解できることですし、これを拡充する努力は無意識のうちにされていると思いますが、これを海外にまで伸ばしていくという意識も必要なのではないでしょうか。

ACASC 2009 の開催にあたっては、自分を含めた「若手」実行委員のアジア諸国の研究者とのネットワークは、ベテラン実行委員の方々のそれに比べて、まだまだ及ばないものでした。無論、各国代表とのオフィシャルな意味でのコネクションはあるわけですが、一歩踏み込んだコネクションを築いていくことの重要性を感じさせられました。

以上、学会誌の冒頭を飾るのもおこがましい、偏った私見を述べさせていただいてしまいました。「上に書かれているようなことはない」と断じていただける方が多ければ多いほど、日本の低温工学・超伝導コミュニティにとっては幸いなことですし、一部にでも思い当たる方がいらっしゃって、私見をご参考にしていただければこれまた幸いなことと思います。